グロテュウスの伝統

— 国際法の思想史と国際社会 —

山 内 進

ペーコン・モンテスキュー・グロテュウス 偉大な哲学者であると同時に法律家そして有能な政治家でもあったフランシス・ペーコンにつきのような有名な警句がある。

「哲学者は、空想的な国家のために空想的な法を作り上げる。彼らの議論は言わば天空にそびえる星のようなものである。その星はあまりにも高いところにあるので、この世に光が届かない」。(『学識の発達』Advancement of Learning, xxiii-47)

ペーコンの冷徹とも冷笑的ともいえるこの認識方法にしたがえば、およそ法というものは、現実の国家の現実の法でしかありえない。しかし、そのような認識にたいして、たとえばモンテスキューは、こう記している。

「特別の知的な生き物は、自ら制定した法を有することができる。しかし、彼らはまた、彼らが制定しなかった法をも有する。そのような法は、知的な生き物が出現する前から法になりうるものとして存在した。それゆえ、知的な生き物は、そのありうべき諸関係、つまりありうべき法を実際に持つことになった。制定法が登場する前から、正義のありうべき諸関係が存在したのである。制定法が命ずるか禁ずるかしない限り、およそ正義も不正義も存在しないと言うのは、円を引く前にはその半径はすべて等しくなかった、というのと同じことである」。

(『法の精神』L'esprit des Lois, I-1)

モンテスキューは、自然法論者である。自然法論者は、法を国家法に限定しない。しかも、ヨーロッパにおいて、

一六世紀頃から始まる近代自然法思想は、ほとんどの場合、国際法の思想と密接な結び付きをもっていた。その代表的な思想家は、むろん、オランダの生んだ偉大な法学者、フーゴー・グロティウスである。彼は、情熱的に国際社会における「法」の存在について語った。

「ローマの法であれ、その他の国の法であれ、国の法を取り扱った論者は多数、存在する。……しかしながら、複数の国民もしくは国民の指導者たちの間に存在する法については、それが自然そのものに起源をもつにせよ、神の律法によって作られたにせよ、慣習もしくは黙示の契約によって導入されたにせよ、これに関心を示した者たちは非常にすくない。この法を普遍的かつ確固とした方法によって論じた者にいたっては、これまで一人もいない。しかし、そのような著作を記すことは、人類にとって重要なことである。……諸国民の間に存在する法に関して確固とした作品を著すことは、つぎのことを考えれば、ますます重要である。古においても現代においても、法のこの分野を空虚な名称以外には何も無いかのように軽蔑する者たちが決して後を絶たない、ということである。ほとんどすべての人々が言うことは、ツキ

ユディウスに登場するエウフェムスの言葉である。すなわち、国王もしくは国の権力に関する限り、有益なことであれば不正義ではない、と。これと同様の主張によれば、最高の幸運の下では、より強力であることがより公正である。また、国家は不正義なくしては運営されえない、と」。(『戦争と平和の法』De Iure Belli ac Pacis. Prolegomena I. 3.)

およそ、グロティウスにとって、アリストテレスの「盗賊団の例」が示すように、「いかなる社会も法なくしては維持されえない」。むろん、国際社会もまたその例外ではない。それどころか、国際社会こそ、法と正義への揺るぎない信念を必要とする。彼は、こうして「人類もしくは複数の国家を互いに結び付ける社会は、法を必要とする」という立場から、国際法の古典『戦争と平和の法』(一六二五年)を書き記すのである。

現代国際法の思想と思想の連鎖 ヨーロッパでは、古来、「法」をめぐる様々な議論が展開されてきた。それは、いま示したように、国内の制定法だけでなく、国際社会あるいは人類の法をも対象とする。しかし、そのような国際社会の法をめぐる議論を正面から「思想の連

鎖」として研究することは、これまであまり見られなかったように思われる。「思想の連鎖」とは、過去の思想との対決（否定・肯定・修正）のうちに新しい思想を作り上げていく作業のことである。この作業が歴史のなかで繰り返されていくことによって、思想は「伝統」となり、現実的力すら獲得していく。

現代国際法もまた、この「思想の連鎖」と無縁ではありえない。それゆえ、「思想」という観点から現代国際法に接近することは、現に存在する国際法を原理的に理解し、また現代そのものを考えるために、一つの有益な方法となるであろう。むろん、これでは余りにも漠然としているので、私は、以下の論述で、この観点から現代国際法思想の一つの潮流を描き出す作業に従事してみることにはしたい。この一つの重要な潮流とは「グロティウス主義」から「新グロティウス主義」にいたる、「グロティウスの伝統」を織り成す流れのことである。これらで、日本では国際法思想のこの潮流について論じた文献はほとんど無いように思われる。しかし、これは理論的にも実務的にも、また歴史的にもかなり重要な「思想の流れ」であり、この潮流の存在と意義を知っておくこと

は非常に重要なことだと私は考える。

前置きはこれくらいにして、本論に入ることにしよう。

一 国際社会の思想

1 中江兆民『三酔人経綸問答』

紳士君・豪傑君・南海先生 国際法は、言うまでもなく人間社会の法である。したがって、その主たる対象となる世界がある。一般的に言えば、その社会とは、国際

社会である。だが、そもそも国際社会とは何であろうか。それは、ある認識によれば狼のばっこする無法地帯であり、そもそも社会ではない。また、ある論者は、これを各主権国家の妥協と協調の場と考える。さらに、これを統一的で平和な、グローバルな社会いわず世界国家と考える理論家も存在する。

この問題を考えるうえで、分かりやすく興味深い素材がすでに日本に存在するので、ひとまずこれを利用しながら話を進めよう。大日本帝国憲法発布（一八八九年）の直前、日清戦争（一八九四―五年）の七年前に刊行された中江兆民の『三酔人経綸問答』（一八八七年）である。この著作は、ヨーロッパ列強の帝国主義を前にして、

弱小な明治日本がどのような内政・外交政策を取るべきかを論じたもので、三人の人物が登場する。一人は「紳士君」、他の一人は「豪傑君」、最後の一人は「南海先生」である。

紳士君と豪傑君は、ある鬱陶しい雨の日に、南海先生の下にブランデーを携えてやってきた。杯を交わしつつ、「政治を論ずる」ためである。

紳士君は、非武装の理想主義的平和主義者である。彼は、ヨーロッパの列強が道徳の原理と経済の理法にそむき、数十百万の常備軍をたくわえ、「罪のない人民に殺し合いをさせる」現実を指摘しつつ、こう主張する。

「文明の進歩におくれた一小国が、昂然としてアジアの端っこから立ち上がり、一挙に自由、博愛の境地にとびこみ、要塞を破壊し、大砲を鋳つぶし、軍艦を商船にし、兵卒を人民にし、一心に道徳の学問をきわめ、工業の技術を研究し、純粹に哲学の子となつたあかつきには、文明だとうぬぼれているヨーロッパ諸国の人々は、はたして心に恥じいらぬでいられるでしょうか。…剣をふるって風を斬れば、剣がいかに鋭くても、ふうわりとした風はどうにもならない。私たちは風になるうではあり

ませんか。」(桑原武夫、島田虔次訳・校注、岩波文庫一四頁。)

豪傑君は、政治的自然主義者である。彼は、紳士君の主張に呆れて、こう反論する。「そもそも戦争というものも、学者風の理論からはどんなに厭うべきものであっても、現実の事実としては、けっきよく避けることのできない勢いというものなのです。…争いは個人の怒りである。戦争は国の怒りである。よう争わないものは、弱虫である。よう戦争しないものは、弱国である。もし争いは悪徳で、戦争はくだらぬことだと言う者があれば、ぼくは答えて言いたい。個人に現に悪徳があるのを、どうしようもないではないか。国が現にくだらぬことをやっているのをどうしようもないではないか。現実というものをもどうしようもないではないか、と」(同前、六三頁)。彼は、名前こそ明記しないが、明らかに中国をさして、「よく肥えたイケニエの牛」と呼び、「なぜ、さつさと出かけて行って、その半分、あるいは三分の一を割き取らないのですか」とすら言いきっている。

南海先生は、穏健で冷静な理性主義者である。彼は、紳士君も豪傑君も極端であり、結局、同一の「病原菌」

に侵されている、と言う。

「あなたがたはみな、ヨーロッパの強国が百万の強兵をやしない、千万の軍艦を造って、噛み合い、とっくみあい、またしょっちゅうアジアまで荒しに来るのを見てきたものだから、そこで思いすごして、彼らはそのうちきつと百・千の軍艦を装備して、侵略にくるに違いない、と考える。……これはどちらも、ヨーロッパ諸国の形勢をいささか思いすごしているところからくるのです。……それに世界平和の主張は、まだ実行はできないにしても、国際社会において、道徳の主義がしだいにその範囲をひろめ、腕力の主義がしだいにその領域をせばめてくるのは、自然の勢いで、紳士君の言われる進化の神の進路というのがこれです。……だから、ヨーロッパ諸国の兵隊は虎かライオン、議会や新聞は金網といったところ、そのうえ勢力均衡という考えがあり、また国際法という約束があって、眼に見えぬところで手足を拘束しています」(同前、一〇三頁)。

つまり、勢力の均衡や道徳の伸長によって、「多少とも国際法を守らなければならない」というのが「国際社会」の現実である、と彼は考える。そこでは、いたずら

に「腕力」だけが支配しているわけではない。

2 兆民における国際社会の三つの型

洋学紳士型国際社会 洋学紳士君の立場は、コスモポリタニズムで、個別国家の枠を取り払おうとする。彼は言う。

「精神と身体を持つものは、ひとしく人間です。ヨーロッパ人、アジア人の区別など、どこにありましよう。イギリス、フランス、ドイツ、ロシアなどは、なおさらのことです。……だから、私は何国人だというのは、けっきょく、地球のうえの何部分に住んでいるという意味です。だから、自分と他人のあいだに境界があるわけではなく、敵対意識が生まれるはずもない。……民主制！民主制！ 甲国とか、乙国とかいうのは、ただ呼ぶ便宜のために、地球の部分を区切っただけのことで、居住民の心をわけへだてるものではありません」(同前、四一—四二頁)。

つまり、紳士君の考えでは、人はみな、民族や人種の差異をこえた平等な存在であり、人々を分け隔てるものは本来にもない。そこでは「敵対意識」など存在しよ

うもない。「地球の各部分をきり裂き、居住民の心をたがいなわけへだてるのは王制のこした禍い」であり、世界を「一個の大きな完全体に仕上げる」ことを肝要だ、というのである。紳士君のこの立場は、国際政治学イングラント学派の用語を借りるならば、「革命主義者の伝統」(マーティン・ワイト)もしくは「カントの伝統」(ヘッドリー・ブル)に合致する。洋学紳士の主張はあまり革命的には見えないが、主権国家を認めないという点で、また国家よりもさらに高い価値に立脚する点で革命的なのである。

ワイトによれば、革命主義者は、自己の価値観を絶対視し、普遍化し、一元化しようとする。この点で、カルヴァン、ルソー、マルクスはそれぞれの「神」を持っており、世界もまたその普遍的な「神」の下で一元化される。紳士君の信仰するのは、「進化の神」であり、また「民主制」である。これはルソーの「人民」につらなると考えることもできるであろう。ちなみに、兆民はルソーの『社会契約論』の翻訳者であった。

カントもまた、普遍的な世界国家を想定していた。当時、もっとも著名な自然法論者であったクリスティア

ン・ヴォルフは、「最大国家 *civitas maxima*」を主張した。ここでは、ある意味で、国際社会は存在しない。なぜなら、その社会はそのものとして普遍的な国家であって、「国際」という概念は消失するからである。紳士君が「民主制」によって「世界」を「一個の大きな完全体」にする、というのもそのような意味である。

紳士君型国際社会は、社会の構成員をただ「人間」だけとし、主権国家を排除し、自らが普遍的な国家となる社会である。ワイトの表現を使えば、こうなる。「それは、国家である(あるいは、国家たらねばならない)」。

豪傑君型国際社会 豪傑君の立場は、政治的自然主義である。これは、国際政治の世界を弱肉強食の自然界との類似のうちに理解する。彼の主張によれば、「勝つことを好んで負けることを嫌うのは、動物の本性」である。「虎、ライオン、山犬、狼はもちろん、昆虫の類にいたるまで、いやしくも天地の間に生きているかぎりのものは、獲物を殺し、取ることに専念しないものはない」。しかも、「生物のなかで賢いものほど勇ましく、愚かなものほど臆病」である。自然がより優れたものを強く、より劣ったものを弱くしているからである。

それゆえ、より優れた文明をもった国がより強く、より劣った弱い国を襲うことはならぬ「不仁」ではない。国際政治とは、そのような狼たちの跳梁する舞台にほかならない。豪傑君は言う。「ああ、このようなくわしく万とも知れぬ虎、狼の視線のもとで国をおさめてゆくものは、軍備以外のなにを頼みとして国を保ってゆけまじょうか」。

豪傑君のこの立場は、「現実主義者の伝統」(ワイト)もしくは「ホップズの伝統」(プル)に合致する。この立場は、つぎのマキアベッリの見解に象徴的に表現されている。

「一国の安全がこれからとる決定に全面的にかかっている場合、正義か不正義か、親切か残酷か、称賛に値するか非難に値するか、ということに気を奪われてはならない。反対に、一国の生命を救い、その自由を守りうるか否か、という二者択一だけを真剣に採用すべきである。その他のことは、いっさい考えてはならない」(Discorsi Sopra la Prima Deca di Tito Livio/Discourses on the First Ten Books of Titus Livy, III-41)。

また、ワイトの言うホップズの方程式「国際関係およ

び国際社会は自然状態と等しい」もまた、豪傑君型国際社会論を適切に表現している。そもそも、ホップズにあって、「自然状態」は即「戦争状態」を意味した。しかも、「社会」は契約によって、はじめて成立する。それゆえ、「契約」によって「国際社会」が成立したという事実はないので、「国際社会」は実は「存在しない」。

豪傑君の自然主義とホップズの「自然状態」論は、ともに利害と実力だけを国際政治の世界の基本的構成要素とする点で、軌を一にする。この論理の下では、主権国家の意思だけが国際関係を規定する。主権国家は自己の意思以外のなものにも拘束されない。国家は完全に自由である。

このような国際社会は、紳士君型国際社会とは異なった意味で、社会たりえない。社会としての公共性、自律性に欠けるのである。豪傑君型国際社会は、それゆえ、ワイトの言葉を借りれば、「社会ではなく、むしろ闘技場である」。

南海先生型国際社会 南海先生は、穏健な、というよりも冷徹で、ある意味で豪傑君型国際社会論よりもさらに現実主義的な認識を示す。彼は、ヨーロッパ列強が互

いに軍備の拡充を図り、勢力均衡の原理が支配しているが故に、容易に衝突も侵略も始まらない、と言う。国際法もまた、その限りで順守される。列強のどこか一国がとくに強大になれば、「国際法などてんで顧みないようになるかもしれない」が、今はそうではない。つまり、「四国の勢力がだいたいつり合っているから、彼らはみなやむを得ず、多少とも国際法を守らなければならない。多くの小国が、併呑の禍から免れているのは、こういう理由からです」と。

彼が、国際社会における「道義」の重みや国際法がそれなりに尊重されている、という「現実」を強調しているのは、重要である。ここでは、勢力均衡の原理を前提としているとはいえず、ヨーロッパ列強もまた互いに交渉し、協調する、あるいはせざるをえない、という「現実」が鋭く指摘されている。

その限りで、南海先生は、勢力均衡を基本原則としつつ、諸国家が利害の調整を図る独自の場として国際社会が存在する、と認識していたと理解することができよう。これは、「理性主義者の伝統」(ワイト)もしくは「グロティウスの伝統」(ブル)に連なる。

ちなみに、ワイトは、この独自の国際社会について、こう記している。「それは、社会である。しかし、国家とは異なった社会である」⁽²⁾。

3 グロティウスの伝統

理性主義者の伝統 中江兆民の三酔人は、「イングラド学派」のワイトやブルの三類型にかなりとってよいほど合致している。しかし、紳士君と豪傑君の明快さと迫力に比較して、肝心の南海先生の論理と熱気はいま一つという印象は拭いがたい。兆民自身、なぜか最後の部分を「南海先生はごまかした」と要約している。

おそらく、兆民の鋭敏な感覚が「理性主義的」国際社会論を南海先生にとらせたとしても、彼はこの点では確固とした明快な論理をもたなかったのであろう。南海先生はたしかに国際法の存在を語っているが、どうみても強力な信念をもって主張しているとは思えない。それは、せいぜい列強が「やむを得ず」守っているにすぎない。

これと国際法を研究することの重要性を語ったあのグロティウスの情熱的な言葉とを比較してみるとよい。南海先生は、信念と明確な構図をもって独自の国際社会論

を展開しきれなかった為に、紳士君と豪傑君の論理の危うさと危険性を指摘しつつも、ついに彼らを説得できなかった、というべきであろう。これは、明治日本のより健全な成長にとって、じつに不孝な事態を象徴的に表現していた、といつてよいのではないだろうか。

なぜなら、国際社会の理性主義的把握は、国際社会の構成員相互の「知的な交流」を重視し、他の構成員の存在と利益そして権利を尊重するからである。人は、なるほど流血を好み、罪深い存在かもしれない。しかし、人はまた、理性的存在であり、その限りで「社会は理性的人々の中の協同の大いなる成功の場である」。この認識の下では、ロックが示したように、そもそも人間社会はその最初の段階からある種の「平和」な「秩序」を有する。

理性主義者は、自然状態を戦争状態とは考えない。ロックと同様に人間理性を信頼したグロテュウスの確信するところでは、それは、人が「社会的性向」を有した状態である。ワイトによれば、これは、「社会となる能力のある状態」のことである。それゆえ、「自然法は社会的行動を命令する」。グロテュウスが自然法を重視する

所以である。この自然法のもとにある「自然状態」は、すでに「共通の交渉」を取り交わし、「平和な状態」の下にある。

ただ、それは、不安定で壊れやすい。しかし、その不安定さは、この（国際）社会の理性的構成員の自立性を放棄して、革命主義者のな「最大国家」を求めるほどのものではない。したがって、「有限契約 limited contract」によって、より安定的な社会を構築すれば、それで十分である。この「より安定的な社会」こそ「国際社会」にはかならない。⁽³⁾

グロテュウスの伝統 ヘッドリー・ブルによれば、国際社会とは「(秩序ある)無政府社会 anarchical society」のことである。この社会にあっては、諸国家は自然状態の下にあるのでも、何らか中央の権力の下にあるのでもなく、全人類という大きな社会、つまり magna communitas humani generis の下で互いに共通の規則や制度に服し、そのことによる共通利益を得る存在である。国際政治の主体は基本的には国家だが、その本質は戦争ではなく、相互的な交通にある。この社会は、その意味において、諸国家社会であり、また「国際社会」にほか

ならない。

つまり、ブルにとって「国際社会」とは「アナキカル（つまり無政府的）」だが特有の秩序をもつ「社会」であり、それは「政府」こそ有しないが、お互いの「共通利益」のために、それなりにルールを守り、協調的で平和的である。この「国際社会」を支配する最も基本的なルールが「国際法」である。

ブルは、このような意味での「国際社会」と「国際法」の観念を生み出し、一般化させるのに最も貢献したのがグロティウスであり、またグロティウスをめぐる思想の連鎖だと考えた。ここに「グロティウスの伝統」が生まれる。彼は言う。

「これが、グロティウスの時代に正当性を獲得した観念である。この観念は、現代においても依然として国際関係の根底にあり、その形態や表現は異なりこそすれ、およそグロティウスの伝統と呼ばれうるようなものの核心を構成している」⁽⁴⁾。

したがって、ブルの強調するところでは、近代ヨーロッパの国際社会は「グロティウスの伝統」の下にある。それは、個別国家の個別的利害追求を決して否定しない

が、国際社会の共通利益をあくまでも要求する。この共通利益を無視する徹底した国家理性主義は否認される。豪傑君流の一面的な自然主義は排斥されるのである。

グロティウス主義 このような独立のかつ自律的国际社会とそれに見合った国際法形成への動きを鋭く把握し、決定的に推進しようとした国際法思想がある。いわゆる「グロティウス主義」である。これは、「グロティウスの伝統」における国際正義への信念と国際社会の自律性への確信、国際社会の構成員の一体化と連帯化を徹底して強調し、二〇世紀の国際法思想に大きな影響を与えた。

グロティウス主義は、国際社会を弱肉強食の世界とも単に強国の駆け引きの舞台と見るのでもなく、諸国家の個別的利害を人類の共通利益のために調整し、抑制し、法の支配の下に置こうとする国際共同体と考える。その背後には、人類の「連帯性 *solidarism*」への確信があった。その意味で、彼らは、「連帯主義者」である。

しかし、これは、紳士君型国際社会論（革命主義・カント主義）とは全く別のものである。なぜなら、グロティウス主義は、あくまで国家の存在を認め、そのうえで連帯主義的な協調と協力を求めるからである。南海先生

がもし、紳士君に対抗する独自の理想主義を展開するとすれば、これだったかもしれない。だが、この思想は、

国際社会の提示する価値観にたいする、深い共感を必要とする。あるいは、自身が共感しうる価値観を国際社会の価値観とするための信念と努力を必要とする。それゆえ、国際社会にたいして自らの説得的な価値観の下にこれに積極的にかかわることなどとうていできなかった明治日本とその知識人に、理性的連帯主義を主張するように求めるのは酷というものであろう。

ヨーロッパにおいても、グロテュウス主義が語られるようになったのは、第一次世界大戦後のことである。だが、この時点においては、日本は少なくともそれを理解し、的確に対処しうるほどの地位と能力を有していたはずである。にもかかわらず、昭和日本は、新しい国際法思想を自己のものとなしえず、結局は豪傑君型国際政治にまい進していった。だが、このような豪傑君型帝国主義を思想的に、そして思想を通じて政治の現実において強く否定したのが、ほかならぬグロテュウス主義だったのである。

二 国際法におけるグロテュウス主義

1 ヴァン・ヴォレンホーヴェン

オッペンハイム グロテュウス主義の代表的論者は、

二〇世紀初頭オランダの国際法学者、ヴァン・ヴォレンホーヴェンとその少し後に活躍した英国の著名な国際法学者、ハーシユ・ラウターパクトである。

ヴォレンホーヴェンは、インドネシア慣習法の權威で、レイデン大学で担当した講座もオランダ領東インドネシア慣習法・憲法・行政法だったが、国際法学にも造詣が深く、第一次世界大戦に際して、国際法学者としてはおそらく最も早く、主権国家の個別的意図を越える「普遍的国際共同体」の構想を示し、その観点から「国際法上の犯罪 *crimen juris gentium*」という概念を提起した。彼は、そのような「国際法上の犯罪」を処罰するために、主要国の軍隊から構成される「国際警察」を作り上げるように主張している。

彼のこの見解は、少なくとも当時の權威ある学説の基本認識とは明らかに異なっていた。実証主義的国際法学の代表的論客であるラッサ・オッペンハイムは、その

『国際法』(第一版)で国家主権を重視する立場をとり、主権にもとづいて行使される戦争に対して、国際法が「平和」を要請する立場から積極的に介入することはあり得ない、と断言した。「国家は、主権者であり、したがってその上位に、独自の要求に服従するように強制することのできる中央権力など存在しえない。それゆえ、戦争を常に避けることなど不可能である」と。

むろん、だからといって、オッペンハイムは国際社会を「自然状態」にみたてたわけではない。戦争が勃発して諸国家の間に「あらゆる平和的な関係」がなくなったとしても、なお「確固とした、相互的な法的義務は残存する」。それが、交戦法規つまり戦時国際法である。彼は言う。「国際法は、紛争に際して相互の相違を平和的に解決する代わりに互いに戦争を行うことにした諸国家に対して異議を唱えることはできないし、またそうしない。しかし、諸国家は戦争を行うことを選択しても、戦争行為や交戦者および中立国相互の関係に関する国際法によって命じられた諸規則には従わなければならない⁽⁵⁾」。

したがって、オッペンハイムによれば、「勃発した戦争の原因がいかなるものであれ、その原因がいわゆる正

当原因であるにせよ、ないにせよ、相互に戦争を行っている交戦者によって、また交戦者と中立国との間で、なされてはならないこと、なされうること、なされねばならないことに関して、国際法の諸規則は等しく適用される。つまり、とオッペンハイムは断言する。

「国際法の諸規則は、いかなる原因に由来するにせよ、すべての戦争に適用される。ゆえに、戦争の原因に関する問題は、国際的倫理にとってはともかく、国際法にとってはほとんど重要な意味をもたない。この案件は、そもそも多数の論者が戦争の正当原因を決定し規定する国際法の諸規則があると主張していなければ、国際法に関する著作で論ずる必要性の全くないものである。戦争の正当原因を定める国際法規など決して存在しない。この点は、強調する必要がある。戦争のある原因を正当とし、他の原因を不正とすることを認めるような国際法規はすべて、国際法に関する著作家たちによって設定されたもので、言わばその著作家たちの規則である。国際慣習もしくは国際条約に基づいた国際法規ではない⁽⁶⁾」。

「国際法上の犯罪」とグロテイウス オッペンハイムの実証主義的立場を明快に否定した最初の国際法学者が

ヴォレンホーヴェンである。彼は、戦争当事国の正、不正を決定することはできる、と考へ、果敢にかつ大胆にその認識の普及に努めた。彼は言う。戦争の正、不正は、要するに、いずれの側に「正当原因」があるかということであり、その判断基準は個々の主権国家を越える「国際秩序」に反するか、否か、にかかっている、と。これは、正しい戦争と不正な戦争とを明確に区別するという意味で、現代の「正戦」論といえるものである。

彼は、一九一六年四月一五日の「イーブニング・ポスト・サタデー・マガジン」誌で彼自身もそれまで用いていた「国際法上の不法行為 delinquency」という用語にかえて、「国際法史上はじめて「国際法上の犯罪 crime in jure gentium」という概念を公にした。そのような「犯罪」を防止するために、「すべての文明諸国家の公平な協力活動」が不可欠である、と彼は訴えた。

このような概念が用いられたのは、例えば一方的な侵略は「世界平和にたいする脅威」とみなされるからである。彼によれば、これに対処するために、文明諸国家は集団的条約を締結し、「国際法廷 international tribunal」を設置しなければならない。この法廷は、ある国

家が他国によって不法に安全を脅かされるか、現に攻撃されている、との訴えが行われた時に、「共同行動 joint action」をとる必要性を決定する。¹⁾

ヴォレンホーヴェンは、彼の構想する正戦論を空論とは考えなかった。彼にとって、文明諸国の派遣軍による「国際警察」活動こそ、国際社会と国際法に新しい時代を切り開くものにはかならなかった。

しかも、この構想は、長い歴史的根拠と思想的背景を有する。というのも、彼の信ずるところでは、すでに三〇〇年ほど前に、同一の構想を提示した偉大な思想家が存在するからである。彼の祖国オランダの思想家、「国際法の父」フーゴー・グロティウスである。

ヴォレンホーヴェンによれば、グロティウスの『戦争と平和の法』は、いままさに必要とされている国際正義のための壮大な正戦論を展開した現代的な作品そのものであった。たしかに、グロティウスは、ガンジーの非暴力主義と等置されるような意味での平和主義者では決してなかった。彼は、放縦で無規律な戦争を否定したが、一切の武力行使を否定したわけではない。グロティウスは、いわば中間的な立場をとろうとしていた。彼にとっ

て、「正義」や「権利」を守り実現するために武力を使用することは、明らかに正当かつ合法的な行為であった。むしろ、そうすることによって、はじめて平和が維持される。問題は何が「正義」であり、何が「権利」であるか、つまり「正戦」とは何かを明らかにすることだった。彼はそれを明確にするために、ローマ・ギリシアの古典や哲学書、そして法律書を渉獵し、それを体系化していった。彼の著作は、まさにその意味で『戦争と平和の法』と題されているが、その内容は実質的には『戦争の法』と呼びうるものである。⁽⁸⁾

もっとも、グロティウスは、「権利」の内容を明確にすることによって、戦争を限定化しようとしていた。『戦争と平和の法』が「権利を執行するのだから戦争を行ってはならない」という立場から書かかれているのも明らかである。彼は、戦争の「不正な原因」を論じ、たとえ戦争の「正当な原因」がある場合でもできるだけ避けるように強調さえしている。ただ単に異教徒であるとかキリスト教を採用しないということを理由として戦争を開始することも認められない。その意味では、「平和」のためのプログラムがなんら記されていないとして

も、彼の狙いは、やはり『戦争と平和の法』を描くことにあった、ということは否定できないように思われる。

ヴォレンホーヴェンのグロティウス解釈 ヴォレンホー

ヴェンもまた、グロティウスに平和主義的な側面があることを否定しない。だが、彼はそれをあくまでもグロティウスの「正戦」論との結び付きのうちに理解しようとした。グロティウスにあっては「平和」は「戦争」と不可分の関係にある、というのが彼の基本認識である。

彼によれば、グロティウスは、「平和の法と戦争行為の法をとくに戦争という問題の光の下において」であり、その基本姿勢を一言で表現するならば、「戦争から平和へ」とか「戦争を通じて平和へ」というものである。グロティウスによれば、「サルスティウスが『賢者は平和のために戦争を行う』というのは、最高に正しい。アウグスティヌスもこれに同意する。『戦争を行うために平和が求められてはならない。戦争が行われてもよいのは、平和を得るためである』と」(『戦争と平和の法』III-25-9)。

グロティウスの場合、平和のための戦争は、他国の権利と国際社会の秩序にたいする侵害を排除し、処罰する

ものである。ヴォレンホーヴェンによれば、戦争の第一の権利は「国家的義務の強制」である。「国家によって行われる不法のなかでもっとも重大なものは国家犯罪 state crime' (シキル maleficia, crimina, delicta) である。

グロティウスは、彼の作品の多くの箇所で、刑罰を科しえない不法行為と犯罪をはっきりと区別している。

さらに興味深いのは、彼がこの理解を「連帯主義」に基づいて行っていることである。

「グロティウスは人類社会 *humani generis societas* の存在に基づいてこう主張している。諸国民および個人は、国際法上の不正にたいして『無実の』国民を救う権限を有する、と。人類社会は—現代的概念を用いるならば—、人類とその構成員を守る権利を有する」⁽⁹⁾。

ヴォレンホーヴェンは、彼独自の、時代を先取りする構想の源泉をグロティウスに求めた。それは、豪傑君型国家行動を人類社会の名の下に「犯罪」視し、これにたいして「諸国民と諸個人」が「刑罰戦争」を行いうる、とする。これは、まさに国際法思想の革新を意味した。

『国際法の三つの段階』 ヴォレンホーヴェンのグロティウス主義は明快である。彼にとって、グロティウスは

現代においても、そのまま通用する思想家だった。それどころか、彼の法思想は、現代において改めてその真価を明らかにしつつある。このような認識をかなり大胆に示した作品が『国際法の三つの段階』(一九一九年)である。ヴォレンホーヴェンは、この著作で国際法の歴史を大きく三つの段階に分けて論じた。

その第一は、「初期国際法の段階」で、オランダ独立戦争の頃から一七五〇年ころまでの段階である。その第二は、「第二期国際法の時代」で、一七〇〇年代後半から一九一四年までの時代をさす。その第三は、「第三期国際法の時代」で「グロティウスの時代 the Hour of Grotius」とも呼ばれる。

第一期を代表するのは、グロティウスの「義務理論」で、国家が国際社会のなかで義務を負う存在であり、違法な行為については国家にたいしても刑罰が科されうる、との認識が示されている。これにたいして、第二期を代表するのはヴァッテルで、彼は国家の主権と独立を過度に尊重した。その結果、国家は完全に自由な存在となり、これを他の国家が「処罰」することなどはや許されなくなってしまう。「グロティウスによれば、犯罪を犯

した国家 the criminal state は他の諸国家によって処罰されうる。ヴァッテルによれば、侵略された国家ですら、怒りにうち震えつつも、自己の領土の侵略者を裁くことは許されない。『われわれは、この侵略者を国際法の違反者として訴えることを受け入れない』と。⁽¹⁰⁾

しかし、ヴォレンホーヴェンによれば、一九一四年の戦争によって、「ヴァッテルの国際法が破産した」ことが明らかになった。この戦争は「犯罪と刑罰とのあいだの闘争」であった。それゆえ、人類をそのような犯罪から守るのは、ヴァッテルではなくグロティウスの国際法である、と人々はようやく認識するにいたった。「グロティウスの時代」が到来したのである。こうして彼は、その歴史的著作をこう結んでいる。

「グロティウスの国際法は、戸口に立って、ノックしている。三〇〇年もの間、われわれは彼にノックをさせてあげてきた。そのノックの音は、われわれにはますます大きくなりつつある。われわれはまだ、鍵を回していない。しかし、かんぬきはすでに抜かれた」⁽¹¹⁾。

ヴォレンホーヴェンの『国際法の三つの段階』は、作品の出来としては、あまり良いとはいえない。しかし、

これは、当時から関心を集めた著作であり、グロティウス主義を鮮明にした最初の作品としての価値を有している。その後、彼ほど明快かつ大胆にグロティウスの現代化を試みる国際法学者は、ラウターバクトを描いていないが、著作は第一次世界大戦以後に飛躍的に発展する国際法思想の連帯主義化に大きな影響を与えた。国際連盟の成立と『戦争と平和の法』刊行三〇〇年(一九二五年)を前にして、グロティウスにたいする関心はますます高まり、グロティウス主義はその強弱の差はあるにせよ、国際社会のなかにしっかりと浸透していった。(統)

(1) マーティン・ワイトは、『国際関係の理論 三つの伝統』(International Theory: The Three Traditions, London, 1991)で、「国際関係に関する思想の様々な伝統、実際の担い手や市民、学者といった人々に影響を与えている伝統」に注目して、これを次の三つに区分している。

- (1) 現実主義者 (Realists) の伝統……国際関係競争状態論
- (2) 革命主義者 (Revolutionalists) の伝統……国際関係最大国家論
- (3) 理性主義者 (Rationalists) の伝統……国際関係平和和社会論

また、ヘッドリー・ブルは、『無政府社会 世界政治における秩序の研究』(The Anarchical Society: A Study of Order in World Politics, London, 1977)で、この三類型にはほ見合う形で、近代的国際システム史における「競合する思想的伝統」として次の三つの伝統をあげている。

(1) ホッブズの伝統……現実主義

(2) カントの伝統……普遍主義

(3) グロティウスの伝統……国際主義

ワイトの三類型とブルの三類型はまったく同一とらわけてはならないが、とくに国際法実証主義に対する理解、大幅に重なり合うので、ここではそれぞれ(1)(2)(3)をほぼ同じ類型と理解しておくことにする。ブルの三類型については、参照、拙稿「グロティウスのマンビュッテンズ」(大谷良雄編『共通利益概念と国際法』国際書院、一九九三年、三五頁)。

(2) M. Wight op. cit., p. 48. 国際社会の「国内化」国内秩序化構想とらう問題については、H. スガナシ(日村英一訳)『国際社会論—国内類推と世界秩序構想—』(信山社、一九九四年)が有益である。

(3) M. Wight op. cit., p. 37-40.

(4) H. Bull, "The Importance of Grotius in the Study of International Relations", H. Bull, B. Kingsbury, A. Roberts (ed.), *Hugo Grotius and International Relations* (Oxford, 1990), p. 72.

(5) L. Oppenheim, *International Law*, vol. II, War and Neutrality, (London, 1906), p. 56.

(6) Ibid. p. 69. さなまに、著者の死後に発行された第四版の編者「マッネー」はこの「戦争の原因」種類、諸目的」の章において、「もし著者が生きていて戦後の版を自ら改訂してゐたならば、この部分を大幅に改訂してゐたに違ひない。」(4th ed., 1926, p. 127.)と記してゐる。

(7) Cornelis v. Vollenhoven, *Verspreide Geschriften*, II (Haarlem, 1934), p. 350ff.

(8) P. Hagemmacher, "Grotius and Gentili: A Reassessment of Thomas E. Holland's Inaugural Lecture", H. Bull, B. Kingsbury, A. Roberts (ed.), op. cit. p. 173.

(9) C. v. Vollenhoven, "The Framework of Grotius's Book De Jure Belli ac Pacis (1625)", *Verhandlungen der Koninklijke Akademie van Wetenschappen, Afd. Letterkunde*, 30 (1931), p. 83. 参照: Idem, "Grotius and Geneva", *Bibliotheca Visseriana*, 6 (1926), pp. 1-81.

(10) Idem, *The Three Stages in the Evolution of the Law of Nations* (The Hague, 1919), p. 28-9.

(11) Ibid., p. 98. なお、国際法の規範的構造転換については、参照、石本泰雄『国際法の構造転換』有信堂、一九九八年。

(一橋大学教授)